

民芸運動と台湾原住民の工芸
——学説史及び集積された資料の整理に向けて——

角南 聡一郎 ((公財) 元興寺文化財研究所)

キーワード

民芸運動、台湾原住民、学説史、工芸

1. はじめに

日本民俗学と台湾、特に台湾原住民との接点は、学説史上からすると多いとは言い難い(角南 2013a)。しかし、柳田国男(1875-1962)や折口信夫(1887-1953)が、台湾総督府が刊行した『蕃族調査報告書』、『番族慣習調査報告書』など、台湾原住民の調査報告書を熱心に読んでいたことが指摘されており、柳田の「山人」や、折口の「異人」などの概念形成に、台湾原住民の調査データが果たした役割は大きかったとされる。また、台湾原住民の研究に先鞭をつけた、岩手県遠野出身の伊能嘉矩(1867-1925)は柳田と親交があった。伊能の遺稿を編集した『台湾文化志』の刊行を柳田が支援したことなどからも、柳田の台湾原住民に寄せる興味関心が、大きかったことを物語るものである。一方、渋沢敬三(1896-1963)を中心とした、アチック・ミュージアムの活動においては、台湾原住民調査が重要なものであったことは、収集資料中に台湾原住民のものが多くことから明らかであろう。コトバの民俗学である柳田民俗学において、日本という空間を跨いで台湾原住民を直接取り上げることは難しいことであつたらう。モノの民俗学である渋沢ミンゾク学においては、これらを日本のものと並べ比較してみることに、一つの意味を与えた。それが後に民具学と呼ばれる一潮流となつていった。

台湾における民芸運動の代表的なものに、戦時下の台湾で刊行された雑誌『民俗台湾』がある。『民俗台湾』の運動についての研究は、近年少なからずなされている(阿部 2009、黄 2010、張 2012)。しかし、その言及の対象は、漢族の習俗や民具がほとんどであり、台湾原住民を抽出して論じられることはほとんどない¹。物質文化研究という点においても、『民俗台湾』は、民俗学・民具学と民芸運動とを接合する、極めて重要な運動である。『民俗台湾』の中心的存在であつた、人類学者・考古学者の金関丈夫(1897-1983)は、民芸運動に共鳴し『民俗台湾』誌上で台湾の工芸品を紹介していた。また、台湾原住民にも深い関心を示し、その生活道具を紹介するなど、実は台湾原住民研究とも接点を有するものであつた。

¹ その中でも唯一とあって良いのが、林承緯の研究で、民芸運動の中の台湾原住民資料について詳しく言及している(林 2006)。また、最近、天野朗子によって柳の台湾での足取りが検証されている(天野 2014a~2014f)。

そこで、本稿では、民芸運動における台湾原住民関連の学説史を整理し、その中で収集された資料の行方を検討することを目的とする。

また、柳宗悦（1889-1961）をはじめとした民芸運動に関わった人々（研究者、収集家）により、日本国内へともたらされた台湾原住民資料がかなり存在する。しかしながら、これらの資料について全体的な言及はまだ見られない。そこで、学説史をまとめることにより、現在国内に所在する資料の来歴を検討するための基礎的研究を試みることができるのではないかと考える。

2. 柳宗悦と台湾原住民

民芸運動の中では、朝鮮、沖縄、アイヌといった国外、異文化の民芸についても大きく取り扱われていた。このような流れの中で、台湾原住民の工芸も捉えられていたのであろう。

民芸運動の中で、台湾原住民の工芸に柳がはじめて台湾民芸に注目したのは、1914年に大正天皇の即位を記念して東京・上野公園で開催された東京大正博覧会であったという（柳 1914）²。ここで博覧会に出品された台湾原住民の工芸を高く評価した。ここに出品された台湾原住民の工芸品には、タイヤル族、サイシャット族、ブヌン族、パイワン族、ヤミ族、アミ族の衣類・装飾品・武器・生活用具であった（ピヤマン編 1914）。民芸運動の黎明期に柳が既に台湾原住民の工芸に関心を抱いていることは興味深い。では『月刊民芸』誌上で最初の台湾原住民関連文献は何だったのだろうか。それは田中俊雄（1914-1953）によるものである。田中は、米沢の織物製造業を営む家に生まれた。柳主宰の民藝運動に参画した田中は、1939年に沖縄を訪れて以来、生涯に3度、離島を含む沖縄を訪問して沖縄織物の研究をし、その成果は『沖縄織物裂地の研究』としてまとめられた（田中・田中 1952）。

田中は、ライ社（屏東県来義郷来義）を経てクナナウ社（現同郷古楼）のパイワン族の織物調査に赴き、以下のように彼らの織物の価値について述べている。

「丁度このまえにここで葬式があつたさうで、うつくしい喪服がいつばいにだしてあつた。手にとるもの、すべて神品といふ気がひしひしする。あのヨーロッパのコプト織などに比肩して決してみおとりのしないものが、ざらにあり、おぼえず胸がときめかざるを得ない。頭目のつけたものだといふモモヒキもうつくしかつた。これらの織物類は蕃人の唯一の財産なのださうで、蕃人のあひだで五十円、六十円といふ高値で売買されてゐるといふ」（田中 1939）。

続いて金関丈夫が台湾工芸全体を概観する中で、以下のように台湾原住民の工芸品についても言及をした。

「織物として見るべきものはタイヤル、パイワン等北部及び南部の高砂族、及び台中州の平埔族の技術であらう。（中略）刺繍はまた、台中、台南、高雄州の平埔族、及びブヌン、パイワンの如き中南部の高砂族にもあり、苗、黎などのものと共通の技術を有してゐる」（金関 1942）。

また木具の項で以下のように、日本統治による彼らの工芸への悪影響に対して苦言を呈している。

² この点をはじめ指摘したのは、林承緯である（林 2006）。

「東部のタイヤルに「二宮金次郎」や「兵隊さん」を彫ることを教えた指導者の名が判れば、筆者は彼に喧嘩を吹きかけるつもりである」とし、「従来台湾の指導家は、工芸指導と云へば土産物の製作であると考えてみたらしい。その結果が今日見る所謂蕃産品であり、蛇皮製品であり、牛角製品である。これらの醜悪な製品を一掃するには先ず指導者の頭脳を改革しなければならない」(金関 1942)³。

つまり、当時の台湾では「蕃産品」つまり、台湾原住民の工芸品が、日本人によって土産物にアレンジされていたことに対する強い反発が示されている。

柳は、台湾の生活用具を調査する目的で、1943年3月14日から4月17日の約1ヶ月間台湾に滞在した。この際に台北をはじめとした各地へと旅し、民芸品を見て歩いている。終始、松山虔三が付き添った他に(松山 1943)、金関丈夫もそのほとんどの行程で同行した。『民俗台湾』には、金関が記録した柳の台湾工芸に対する種々のコメントが掲載されている。その中で台湾原住民の工芸品についての記述を抜粋してみよう。

「赤絵の小皿 高砂族のうちにだつて尊敬すべきものが数々あることを知らなければいけない。われわれに出来ない立派な技術をもつてゐることを、素直に認めなければ」(柳 1943c)。

「本島のものに非常に尊敬すべきものが多いと云ふことが判つて大変愉快に思つてゐる。先づ高砂族では織物が圧倒的に優れてゐる。若し三百年前にこれが日本に渡つてゐたら、疑ひもなくこれは大名物裂れになつてゐるに違ひない。また若し数千百年前に渡つてゐて、これが勿体ないたとへではあるが、仮に正倉院の御物に混つてゐたとしても、何人もその価値を疑ひはしないに違ひない。今ごろは大騒ぎして研究されてゐるに相違ない」(柳 1943c)。「高砂族を原始民族として、低いものに見るのは一面当然でもあらうが、われわれの方が頭を下げて教へを乞はなければならない点があると云ふことは、これまた当然認めなければならない」(柳 1943c)。

「潮州ライ社にて かう云ふ立派なもの(パイワンの織物)を見ると、これを作り出す生活を尊重して生かしてやり度いと云ふ気がすぐ起る。さうしなければ済まないやうな気がするんだが、それがほんとなのぢやないかなあ」(柳 1943c)。

「羅東郡寒溪のタイヤル族 寒溪はタイヤルの特色がよく生かされてゐる。そして村や住居が清潔で衛生的に改善されてゐてなかなか立派だ。この点はアミ族の場合とは対蹠的だ。寒溪は理蕃政策に一つの解答を与へてゐる。及第点に達してゐると云つてもいい。衣服なども苧麻を染めて手織りで作つてゐるが、非常にいいものが出来る。美しいものを作る本能がまだ残つてゐるんだね」(柳 1943c)。

柳はアミ族の集落も訪れているが、具体的な言及はほとんどされていない。アミ族の生活改善が著しく、柳の印象は今一つであったようだ。

また同誌の巻頭言にも以下のようなコメントを寄せている。

「高砂族の織った織物を、美しいと見る人は多い。併しそれを産んでくれた人々に驚きを感じる人が稀なのは不思議である。彼等を未開人と軽蔑してゐる人は、その布の美しさを知つてゐる人とは思えない。ましてあんな原始人にどうしてこんな美しい布が織れるのかと考える如きは僭越の至りである。さうして又、なぜこんな事が吾々に容易に出来ないのかと考

³ この部分は後に本文が収められた『南方文化誌』では削除されている(金関 1977)。

える如きも、うぬぼれから来るのである。吾々には出来にくく、彼等には出来る力が当然あるのだと、そこまで考へてくれる人が稀なのは淋しい。美しさの魅力は、現れた姿よりも、匿れてゐる力にこそ潜んでゐる。物に驚きがあるなら、それを産んでくれる人に、一段と驚きを感じられねばならない。物をのみ愛して、人に冷かなのは、真に物を愛していない証拠ではないだらうか」(柳 1943b)。

柳は「高砂族」、つまり台湾原住民の工芸品、特に織物に対して、これが正倉院御物に混在していても違和感がないという例えのように絶賛をしている。柳にとって台湾の工芸品の中で印象に残ったものの一つが台湾原住民の織物であったといえよう。

また、渡台時に開催された座談会において、柳は台湾訪問の目的を次のように述べている。「さあ、何かからお話ししたらよろしいやら…お話しします上に、私がこちらに参つた目的は、この本島人の生活に用ゐられて居る工芸品を見度い云ふ事と、高砂族の品物をよく調べて見たいと云ふ事でありました」(柳ほか 1943)。

つまり、柳の中では台湾を訪れる前から、台湾原住民の工芸をじっくりと見てみたいという目的があったことがわかる。

更に座談会に出席をした中村哲(1912-2003、当時台北帝国大学にいた政治学者で、『民俗台湾』にも寄稿していた)の「高砂族の物で面白いものはありませんでしたか」の問いに、次のように答えている。

「高砂族の物はさつきもお話したが、パイワンのライ社に行きましたが、あれ等が着てゐる物は仲々立派なものです。織方も普通で。今のものは材料は少し悪くなつて来てゐますが…。交易所に出て来る時なんか、とて美事なものを着て出て来ます。之は然し在来のやり方をやつて居るわけですが、それよりも一つ興味を引いたのは、羅東の奥のタイヤルで寒溪と云ふ部落です。苧麻で布を作つて居りますよ。材料は良いし織機は昔風のもので、如何にも良いものを作ります。今でもいい物を作る力があるのです。ただ缺点是染料ですが、化学染料の染粉でやつてゐるので、直ぐ色が褪せましてね。昔風の自然染料でやればもつと良いものができると思ひますね」(柳ほか 1943)。

台湾原住民の織物は、古来の形状を留めていることを高く評価しており、最近はその素材に変化が生じていることを指摘している。柳が訪れた台湾原住民の集落は、寒溪(宜蘭県大同郷寒溪)(タイヤル族)、クナナウ社、ライ社、大武(現台東県大武郷)?、知本(現台東市)?(パイワン族)、具体的な場所は不明であるが、台東?、花蓮?、田浦社(現花蓮市)(アミ族)、それに花蓮県新城郷に立ち寄っているので、タロコ族にも出会った可能性がある(柳 1943d; 天野 2014a、図 1)。クナナウ社とライ社を訪れたのは、先の田中俊雄による調査を参考とした可能性が高い。

3. 民芸運動と台湾原住民工芸

では柳以外の民芸運動に参加した人々は、台湾原住民工芸をどのように捉えていたのだろうか。以下、それぞれの著作などから抜粋してみよう。

民芸運動の主要人物であった芹沢銈介(1895-1984)は、台湾原住民の織物・装飾品などを収集していたことが知られる。これらは現在、静岡市立芹沢銈介美術館及び仙台市の東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館に収蔵されている(乾 1982)。

染織家・岡村吉右衛門 (1916-2002) と収集家・張永欣 (1912-1977) の共著による『台湾の蕃布』は、民芸運動の中の台湾原住民工芸の一つの到達点である。『台湾の蕃布』上巻の序で張と岡村は、次のように記している。

「台湾に於ける山胞の生活は、他の原始民族と同じく精神文化と一体になっており、原始信仰に支配された宗教文化が生活面にそのまま形をとって現われるものである。本書でこれから述べようとする織物も勿論その例を逸脱するものではなく、むしろ彼等の宗教が骨格を形造り、社会制度が肉づけした文化相を明らかにしていこう。この文化に対し、台湾省人と日本人の二人の著者が、彼等に代ってそれぞれの立場から記述しようとするものである。(中略) 特に織り上げた布を眺めるとき、「蕃」として賤しむ理由のない美しさの前に心を打たれ、非常に高度であった美的情操と、仕事に対する偽満のない点に感動しない訳にはゆかないのである。高度の精神文化の精華としての織物に対して、蕃布の字は適當ではないとも考えられるが、翻って蕃と云う文字が茂る、殖えると云う意味であることを考慮に入れるとき、心が壮んであり、美しさが繁る布と云う解釈も充分成り立ち得ると思う。その意味に於て、蕃布の文字を使うことにした。蕃布の中の一部はエジプトのコプトや中南米のプレンカの織物にも匹敵し得るものが見出させる」(岡村・張編 1968)。

岡村は本書作成のため、1967年11月6日から11月22日と1968年4月5日から5月28日まで、渡台し現地調査をおこなった⁴。2度目の調査には郡上紬で知られた宗広陽介が伴った。

張永欣とは張耀燦の筆名である。張は1912年、台中県大雅郷(現在の台中市大雅区)に実業家の家に生まれ、台北において66才で病没した。張は日本に赴き19歳で日本の名教中学を卒業した。1936年に台北帝国大学理農学部に進学した。卒業論文は「岸裡大社與臺中平原的開發」で、後にその古文書1132点を母校に寄贈した。岸裡社とは現在の台中市神岡区のことである。戦後は実業家としての本業の傍ら臺中県文獻会の委員として、また古董文物の収集家として活動した。張は特に原始宗教信仰と台湾の民族芸術に関心を示した。後に弟の張添根が鴻禧美術館を設立した。

『台湾の蕃布』所収資料総数56点の内訳は、東京の日本民芸館蔵16点、奥野敏雄蔵15点、張永欣蔵8点、岡村吉右衛門蔵7点、岡田弘蔵4点、畑中基良蔵4点、芹沢銈介蔵1点、瀬川孝吉蔵1点である。

日本民芸館蔵のものは、柳宗悦収集資料であろう。奥野敏雄は京都の古民芸店店主であった。畑中基良は京都の書店・有秀堂のオーナー、岡田弘は東京の民芸品店・備後屋の店主である。瀬川孝吉(1906-1998)は、植物学者であるが、台湾原住民の研究者、資料収集家としても知られる。

岡村の収集した織物は、後に沖縄県立芸術大学に収められ、それを記念した展示も催された(沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館編 1997)。

台湾工芸の父と呼ばれる顔水龍(1903-1997)は、台南下營郷紅厝村(現台南市下營区紅厝村)に生まれた。絵画を学ぶため国立東京美術学校西洋画科(東京芸術大学美術部絵画科油画専攻の前身)に入学し、卒業後にパリへ留学した。後に大阪のスモカ歯磨の広告デザイ

⁴ 岡村らの調査の様子は、東京民芸協会刊行の『民芸手帖』に連載された(岡村 1968a～岡村 1968h)。

ンで有名となった。台湾へ戻った後は美術やデザインの教鞭を執るかたわら、『民俗台湾』の運動にも参加した。顔は柳が台湾に来た際にも、台中と台南の案内人を務めた。柳は顔の台南の自宅で、タイの籐製の蹴鞠などを見ている（柳 1943c）。その頃の顔は、総督府嘱託の身分で、台南での工芸調査を進め、本格的な工芸指導を開始していた（天野 2014a）。

顔は、戦後著した『台湾工芸』の中で、原住民各部族の生活用具を工芸品として取り上げている（顔 1952）。顔は 1935 年 5 月に蘭嶼を訪れたのを契機に、原住民を題材とした作品を描くようになった。蘭嶼のヤミ族の他にも、タイヤル族、サイシャット族、ブヌン族、ツオウ族、パイワン族、ピユマ族、ルカイ族、アミ族などであった。顔は現地で生活用具の収集や撮影もおこなっていた。蘭嶼以外では屏東のパイワン族、三地門のルカイ族がよく描かれている（涂 1993）。

丸山太郎（1909-1985）は、長野県松本市の出身で、自らの収集品をもとに松本市に松本民芸館を設立したことで知られる。丸山は、1936 年に東京に開館した日本民芸館の開館を報じる新聞記事であったという。その後、日本民芸館を訪れ、この運動に共鳴し、後に民芸協会長野県支部の設立にも参加した。丸山は台湾原住民の工芸にも関心を抱き、実際に現地へと足を運んでいる。丸山は民芸協会の会員でもあった、台東市で古物商を営む、黄順義の協力で資料を収集し持ち帰った。これらは現在、松本民芸館に収蔵されている。

以上のように、柳が台湾原住民の工芸を評価し、『民芸』誌上で紹介したことなどにより、国内では民芸運動の中での台湾への興味関心が高まったと考えられる。そして丸山など各地の収集家が台湾まで赴いて、工芸品を求めている。こうして持ち帰られた資料は現在、日本国内に所在する、台湾原住民資料となっている。つまり、国内に所在する理由の一つとして、柳をはじめとした民芸運動による、台湾原住民工芸の評価があったのではなかろうか。

4. 民芸運動周辺の人々と台湾原住民工芸

民芸運動に直接関わったわけではないが、柳と前後して台湾原住民の工芸を愛で、収集した人々がある。ここではその中の代表的な数名を取り上げておきたい。

画家で収集家でもあった宮武辰夫（1892-1960）は、台湾原住民の資料にも興味を抱き、パイワン族、タイヤル族、ブヌン族、ヤミ族の村を訪れて収集をしている（角南 2013b）。民芸運動と呼応し、『月刊民芸』や関西の民芸関係者が多く携わった『阪急美術』などに寄稿している。宮武が収集した資料は、大阪府箕面市の自宅に「原始芸術蒐集室」を設け展示されていたが、後に神戸市の豊雲記念館に収められた。

杉山寿栄男（1885-1946）は、はじめ図案家として出発したが、工芸史の研究者として、収集家として著名となった。杉山の略伝（藤沼・小山 1997）から台湾関係のものを抜き出してみる。原始工芸、アイヌ工芸に特に関心を示し、研究をおこなった。原始工芸の側面では、考古学者と行動を共にした。また、民芸運動の関係者では、アイヌ工芸関連で芹沢銈介、式場隆三郎と交流があった。杉山は、1927 年 3 月に松村瞭、甲野勇が人類学的調査で台湾に赴くのに同行している。この時の見聞を同年 5 月 21 日に東京帝国大学人類学教室で開催された、東京人類学会第 400 回例会にて、「台湾旅行談」として講演した。この要旨は『人類学雑誌』に掲載された。また同年 6 月 22 日に東京大学山上会議所で開催された日本考古学会例会にて「台湾蕃族の工芸」の題目で講演を行った。この内容は翌月の『考古学雑誌』

に掲載されている。翌1928年7月にも台湾旅行をおこなったことが確認されている。この他に台湾原住民関係の文献に、主にヤミ族の工芸について述べられた『文明協会ニュース』掲載の「台湾蕃族の土俗工芸を採ねて」、『台湾蕃族工芸図説』がある。杉山が収集した台湾原住民関係資料は、現在、多賀城市東北歴史博物館に収蔵されている（藤沼・小山 1997）。

小林保祥（1893-1984）は、幼少の頃に、植物学者・牧野富太郎に絵の手ほどきを受けたという。後に渡台して、台湾総督府臨時台湾旧慣調査会に就職し、台湾原住民の調査に従事した。その後も台湾に留まり、パイワン族の集落に画房を設けて製作の傍ら、同族の調査をおこなった（岸田 1985a）。1938年に帰国している。帰国後、小林は1944年に柳田国男の助力によって『高砂族パイワヌの民芸』を上梓する。書名に「民芸」とあるが、柳田とは親交のあったものの、民芸関係者とは接点はなかったようだ。

岡村吉右衛門は宗広陽介から本書を教えられたといい、「標記の著書の執筆者、小林保祥氏の名は、柳師訪台の折りなにかと便宜を計られた張永欣氏、顔氏からも研究者として小川尚義氏の名は教えられたが小林氏の話は聞いていない。長期にわたって高砂族の中で生活した同氏は、柳師渡台の前に帰国していたことにもよろう」（岡村 1996e）。

岡村は小林の視点について次のように讃えている。

「柳師提案の民芸は、民衆的工芸の略である。小林氏の著書の民芸は、民族工芸の略である。共に民芸という表記になってはいても含みが違う。言葉は造語者の意見通りには育たない。が、小林氏のいう民芸は、健全であり、土産物代名詞に堕ちた今日流行語の“民芸”の佛のないのはせめてもの幸いと思う。読者も小林氏の善意を汲んでほしい」（岡村 1996e）。

小林は直接、民芸運動とは関わらなかったが、台湾原住民の工芸を見る視点は、民芸運動に近いものがあつたといえよう。

5. 民芸運動と国内所在資料の来歴

以上概観したように、民芸運動及びその周辺では、台湾原住民に少なからずの関心を抱いていたことがわかる。前述したように、柳宗悦収集品は日本民芸館に、芹沢銈介収集品は静岡市立芹沢銈介美術館及び東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館に、岡村吉右衛門収集品は沖縄県立芸術大学に、丸山太郎収集品は松本民芸館にそれぞれ収められている。また、民芸運動周辺の人々では、宮武辰夫収集資料は豊雲記念館に、杉山寿栄男収集品は東北歴史博物館に所在する。

台湾原住民の工芸品は、紀年銘を持つものは皆無に等しい。そのような条件では、資料の来歴が非常に重要となってくる。つまり、誰によっていつ収集されたかが年代観を決定する大きな要素となってくる。しかしながら、所蔵館では台湾原住民の工芸品の専門家がないなどの理由から、資料が展示されることは少なく、図録などに掲載されることも多くはない。資料とともに収集時の記録を保管することは非常に大切なことであり、両者は不可分なセットであるといっても過言ではない。こうした民芸運動と関連する資料は、おおよそのコレクションの成り立ちが判明しているものが多い。これらを収集年度を勘案しつつ、総合的に検討すること、時期別の変遷を明らかにすることが可能であろう。民芸関係の収蔵資料は、織物の数が抜きん出ているようである。これは柳が当初より、台湾原住民の織物を高く評価し、自身も収集したことによるものだろう。加えて後に岡村らによって『台湾の蕃布』が上

梓され台湾原住民の織物の素晴らしさ、芸術的価値などが広く世間に周知されたこともあってではないかと考えられる⁵。

今回試みてみたような学説史上の整理を行いつつ収集資料の来歴を確認するという基礎的研究を構築することにより、更に研究の可能性が広がると考えられる。従来は民芸運動関連の資料は、民芸というデシプリンの中で言及されることがほとんどであり、モノそのものの検討がなされることは少なかった。基礎的研究の先には、民芸運動関係者によるコレクションは、アチック・ミュージアムによって民族学的、民具学的視点から収集されたもの、東京大学理学部人類学教室によって民族学的、人類学的視点から収集されたものなどと、同一の基準で比較検討することが可能となるであろう。物質文化研究という大きな枠組みの中では、分野を跨いでモノとしての情報を純粋に吟味することが出来るだろう。

6. おわりに

本稿では、大正期に起こった民芸運動の中で台湾原住民の工芸がどのように捉えられていたかを、学説史と収集されたコレクションの来歴などを整理する中で考えてみた。民芸運動では台湾原住民の工芸は高く評価され、中でも織物が最も人気があったことを明示した。このような傾向は、戦後も断絶することなく継続していったことが見て取れる。台湾が中国と大きく異なり台湾であることの要素として、台湾原住民の存在があることは、戦後も同様であった。また張永欣のような民芸運動に呼応した台湾人収集家の存在や、日本語が通じるということも、収集家にとっては訪れやすい海外であったと考えられる。いずれにせよ、多くの台湾原住民資料が日本国内に所在しているが、総合的な検討を行うには至っていない。資料を保管しきれなくなった収集家がコレクションを売却、寄贈することがしばしばある。こうした保管者・保管先が変わったコレクションの行方をしっかりと把握することも、今後の課題の一つであろう。

本文中は学説史の整理検討という性格上、先学の敬称を略した。本稿を成すにあたっては、林承緯先生に多大なるご指導・ご教示を賜った。また、資料の調査及び検討については山田仁史先生のご教示・ご協力を得た。また本研究には、文部科学省科研費平成 19～21 年度基盤研究(C)「20 世紀前半に日本人が収集した中国民具についての文化人類学的研究」、文部科学省科研費平成 25～27 年度基盤研究 (C)「日本国内所在・台湾原住民族資料とその来歴の基礎的研究」による成果を含んでいる。

参考文献

阿部 純一郎

2009 「戦時下台湾における三つの「地方文化」構想—『民俗台湾』と日本民芸協会の民芸保存活動を事例として—」『ソシオロジ』54 巻 2 号：71-88。

天野 朗子

⁵ 無論、織物が嵩張らず軽くて持ち運び易いことも、大きな要因であっただろう。

- 2014a 「台湾の工芸と柳宗悦－柳宗悦の台湾調査」『民芸』737号：6-15。
2014b 「台湾の工芸と柳宗悦(2)－台湾北部の旅」『民芸』738号：64-67。
2014c 「台湾の工芸と柳宗悦(3)－台湾中部の旅」『民芸』739号：51-55。
2014d 「台湾の工芸と柳宗悦(4)－台湾南部の旅」『民芸』740号：55-58。
2014e 「台湾の工芸と柳宗悦(5)－原住民の工芸」『民芸』741号：64-67。
2014f 「台湾の工芸と柳宗悦(6)－調査を終えて」『民芸』742号：55-59。
- 池田 敏雄
1977 「台湾の台所道具」『民芸手帖』228号：12-19。
- 伊藤 清忠
1969a 「台湾の民芸とデザイン」『民芸手帖』133号：8-13。
1969b 「台湾の民芸とデザインⅡ」『民芸手帖』134号：20-26。
- 乾 由明
1982 『歩：芹沢銈介の創作と蒐集』紫紅社。
- 岡村 吉右衛門
1968a 「台湾紀行1」『民芸手帖』116号：50-52。
1968b 「台湾紀行2」『民芸手帖』117号：24-35。
1968c 「台湾紀行3」『民芸手帖』118号：18-27。
1968d 「台湾紀行4」『民芸手帖』119号：20-31。
1968e 「台湾紀行5」『民芸手帖』120号：26-33。
1968f 「台湾紀行 最終回」『民芸手帖』121号：22-27。
1968g 「紅頭嶼紀行1」『民芸手帖』124号：8-17。
1968h 「紅頭嶼紀行2」『民芸手帖』125号：46-53。
1996a 「台湾先住民の織布(一)」『民芸』517号：50-55。
1996b 「台湾先住民の織布(二)」『民芸』518号：50-56。
1996c 「台湾先住民の織布(三)」『民芸』519号：50-55。
1996d 「台湾先住民の織布(四)」『民芸』520号：50-55。
1996e 「『高砂族・パイワヌの民芸』」『民芸』522号：50-55。
- 岡村 吉右衛門・張永欣編
1968 『台湾の蕃布』上・下 有秀堂。
- 沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館(編)
1997 『台湾原住民の織布展－岡村吉右衛門コレクション』沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館。
- 奥野 敏雄
1965 「台湾の旅」『民芸』148号：18-20。
- 金関 丈夫
1942 「台湾工芸瞥見記」『月刊民芸』43号：22-26。
1977 『南方文化誌』、法政大学出版局。
- 顔 水龍
1952 『臺灣工藝』、光華印書館。
- 岸田 幸吉

- 1985a 「台湾高砂族の織—小林保祥氏の戦前における調査記録より:その 1—」『月刊染織 α』1985 年 5 月号: 62-65。
- 1985b 「台湾高砂族の織—小林保祥氏の戦前における調査記録より:その 2—」『月刊染織 α』1985 年 6 月号: 23-25。
- 1985c 「台湾高砂族の織—小林保祥氏の戦前における調査記録より:その 3—」『月刊染織 α』1985 年 7 月号: 62-65。

黄 淑芬

- 2010 「看圖說故事:思想起『民俗台灣』—以民藝解說與民藝之研究為中心」*Bulletin of Asian Design Culture Society : International Symposium of Asian Design Culture Society*, pp.529-540。

小林 保祥

- 1944 『高砂族パイワヌの民芸』、三国書房。

ジー・シー・ピヤマン (編)

- 1914 『東京大正博覧会出品目録』、英文日本案内社。

涂 瑛娥

- 1993 『蘭嶼・装飾・顔水龍』、獅子図書。

杉山 寿栄男

- 1927a 「台湾旅行談」『人類学雑誌』42 卷 6 号: 240。
- 1927b 「台湾蕃族の工芸」『考古学雑誌』17 卷 7 号: 473-494。
- 1929a 「台湾蕃族の土俗工芸を探ねて(上)」『文明協会ニュース』4 号: 60-73。
- 1929b 「台湾蕃族の土俗工芸を探ねて(下)」『文明協会ニュース』6 号: 79-94。
- 1929c 『台湾蕃族工芸図説』第 1 輯第 1 卷、工芸美術研究会。

角南 聡一郎

- 2013a 「台湾におけるミンゾク学の萌芽と日本民俗学—研究者の動向と物質文化研究に着目して—」『東アジア民俗学史シンポジウム予稿集』。
- 2013b 「芸術家・宮武辰夫の調査と蒐集」『日本民具学会第 38 回大会発表要旨集』。

竹下 賢一

- 2011 『丸山太郎—美しいものが美しい』、ほおずき書籍。

田中 俊雄

- 1939 「台湾の蕃社」『月刊民芸』7 号: 34-39。

田中 俊雄・田中 玲子

- 1952 『沖縄織物裂地の研究』、明治書房。

田中 豊太郎 (編)

- 1963 『民芸図鑑』3、宝文館出版。

張 永欣

- 1965 「台湾民芸の現状」『民芸』148 号: 5-12。

張 修慎

- 2012 「戦時下台湾における「郷土意識」と柳宗悦の「民芸思想」—雑誌『民俗台湾』と『月刊民芸・民芸』との比較」『桃山歴史・地理』47 号: 38-67。

陳 炎正

2000 「岸裡社史料」『臺灣源流』19号：63-73。

藤沼 邦彦・小山 有希

1997 「原始工芸・アイヌ工業の研究者としての杉山寿栄男(小伝)」『東北歴史資料館研究紀要』23号：1-29。

松本市立博物館附属施設松本民芸館 (編)

2009 『松本・民芸・丸山太郎—丸山太郎の仕事:丸山太郎生誕100年記念特別展』松本市立博物館附属施設松本民芸館。

松山 虔三

1943 「たいわんところどころ-民藝館長柳宗悦先生に随行して-」『台湾公論』8巻5号：108-111。

丸山 太郎

1969 「台湾の民芸品を買いに」『民芸手帖』139号：18-20。

1976 「台湾に旅して」『民芸』281号：10-36。

1977a 「再び台湾に旅して (一)」『民芸手帖』229号：26-28。

1977b 「再び台湾に旅して (二)」『民芸手帖』230号：34-36。

1977c 「再び台湾に旅して (三)」『民芸手帖』231号：32-34。

三山 陵

1997 「台湾工芸運動の先駆者顔水龍先生を訪ねて」『民芸』537号：60-64。

林 承緯

2006 「台湾の民芸と柳宗悦」『デザイン理論』49号：63-73。

2006 「柳宗悦與台湾民藝」『文資學報』2号：71-88。

2008a 「台湾における民芸運動の受容」デザイン史フォーラム編『近代工芸運動とデザイン史』、pp.177-291、思文閣出版。

2008b 『民芸運動の理論と実践：柳宗悦の台湾観と沖縄観を中心に』大阪大学。

2008c 「顔水龍の台湾工芸復興運動與柳宗悦—生活工芸運動之比較研究」『藝術評論』18号：167-195。

2010 「從金關丈夫的民藝書寫看民藝運動對臺灣工芸研究萌芽的影響—以雜誌《民俗臺灣》之〈民藝解說〉為中心」『臺灣文獻』61巻2号：35-56。

柳 宗悦

1914 「我孫子から 通信一」『白樺』5巻12号：72-82。

1943a 「台湾の民芸に就いて (上)」『民俗台湾』23号：2-6。

1943b 「巻頭言」『民俗台湾』24号：1。

1943c 「台湾の民芸に就いて (下)」『民俗台湾』24号：12-16。

1943d 「台湾の生活用具について」『月刊民芸』50号：2-6。

1955 「台湾高砂族の織物」『民芸』26号：26-27。

1965 「台湾の民芸を語る」『民芸』148号：13-15。

柳 宗悦・金関 丈夫・大倉 三郎・中村 哲・立石 鉄臣

1943 「生活と民芸座談会—柳宗悦氏を囲んで—」『台湾公論』8巻6号：53-71。

渡辺 正一・佐々木 芳人・小田部 温・中川 隆史・横井 智ほか

1968 「座談会台湾の民芸旅行」『民芸手帖』117号：8-22。

【図版典拠】 図1 天野 2014a を一部改変。

Keywords

Mingei Movement , Formosan Aborigines , doctrinal history , Arts and Crafts

図版



図1 柳宗悦渡台時の訪問地